

形式陶冶論から行動目標論への転換と日本的受容の結末

浅 沼 茂 (立正大学心理学研究所客員研究員 (Ⅱ種)、放送大学客員教授)

The Transition from Formal Discipline to Behavioral Objectives Approach and Its Aftermath in Japan

Shigeru ASANUMA (*Researcher of the Institute of Psychology, Visiting Professor of the Open University of Japan*)

Abstract

In this paper, I intend to clarify the achievements and significance of Edward Thorndike, a renowned American psychologist who helped lay the scientific foundation for educational psychology, concerning designing the Japanese curriculum which has developed in due course of time. Thorndike's epoch-making empirical discovery threatened "formal discipline", a concept that certain subjects should be studied for the primary purpose of exercising and developing general intelligence which was prevalent during the time. Contradicting his epoch-making discovery, Ralph W. Tyler developed a behavioral objectives approach, initially designed as a tool for transferring intangible educational achievement into observable academic reward. Educational attainment is translated as "attainment objectives" in Japanese. This concept has been prevalent in the contemporary Japanese curriculum, academic course of study, syllabus, study carte, PDCA, and others. Educators are now swamped with these papers rather than actual teaching practice. The current behavioral objectives approach has disadvantages and the deficiency must be analyzed and reconsidered. In the 1970s, the dominant curriculum paradigm was challenged by the phenomenological paradigm, "Rashomon approach." Despite its authenticity, this paradigm lost the hegemony of curriculum reformation. The mainstream of the curriculum discourse has been geared toward the behavioral objectives approach in Japan.

Key words : Formal discipline, behavioral objectives, curriculum management

目 的

本研究は現代日本の小学校・中学・高校のみならず、大学においてまで授業の到達目標、シラバスを管理職にまで提出し、管理されるようになった「カリキュラム・マネジメント (カリマネ)」という考え方の起源がどこにあり、そのルーツを明らかにすることにある。そこには、教育心理学上のパラダイム・シフトが深く関わっているということを明確にし、それが日本の教育界に大きな影響を与えてきているということ明らかにしたい。この管理・経営パラダイムは、教職「ブラック」化に深く関わっている。カリマネの縮刷版 PDCA (Plan Do Check Action) という教育管理思想が教職の現場を深く蝕んでいることに気がついていないカリキュラム研究者は多い。それがなぜ、支配的パラダイムとなったのであろうか、全く不思議である。教師の仕事、学校の現場を全く無視した、生徒を見ることに背を向

けるような文書主義は、一体どこから来たのであろうか。

1. カリキュラムに関わる議論と教育心理学との関わり

そもそも心理学がドイツのウイヘルム・ブントの「内観法 (introspection)」によって科学として独立したことからアメリカでの分野の発展は、ヨーロッパが起源であった。カリキュラムという学問は、それに対してアメリカにおいて独自の発展を遂げたと言ってもよい。心理学と融合した教育学は、知能指数の測定や各教科でのアチーブメントと知能との関係などが19世紀の教育学の科学とされていた。しかし、1900年のパリの万博で、アメリカの出し物が「学校」であったことは革命的な意味をもっていた。しかも、アメリカの出し物、学校のカリキュラムは、ヨーロッパ型の伝統的な一斉授業ではなく、総合学習や楽しい活動型の学

習であった。ヘルバルト主義型の教育方法とカリキュラムは、19世紀の末までは、何か最先端のヨーロッパモデルのように考えられていた。しかし、移民の国、アメリカでは、お互いの文化の違いをどう標準化し、コミュニケーションを可能にするかということが、教育において重要な課題となっていた。ダイアン・ラビッチ、デイビッド・タイアックらの編集したアメリカの教育史の金字塔『スクール』は、20世紀の変わり目のアメリカの学校の変遷について詳しい¹⁾。

学校のカリキュラムをどうするかということは、当時の大きな政治的テーマであった。19世紀後半のアメリカへの移民は、これまでの西ヨーロッパから、東ヨーロッパ、ロシア、イタリアなどからの移入が増大していた。異なる言語、文化的背景をもつ人たちの子どもの教育は、大きな政治的課題となった。ハーバート・クリーバード（私の恩師の一人、アメリカのカリキュラム史の最高峰 University of Wisconsin-Madison）というカリキュラムの歴史家は、19世紀末の議論を主に4つの類型にまとめている²⁾。

- 1) カリキュラムは、これまでの伝統的教科を中心に国民的教養として、誰でもが習得すべきものである。たとえ、それが高校数学や古典や外国語であろうとも格差なく、学ばなければならない内容である。
- 2) カリキュラムは、伝統的教科であろうとも科学的知見に基づいて編成されるべきである。数学は、本当に「一般知能 (IQ)」に転移するのか、学習時間は学力と本当に関係するのか、など科学的検証が必要である。
- 3) カリキュラムは、子どもの発達を考えて編成すべきである。子どもが興味を示さないのに、三角関数の話や使いもしない外国語の勉強などなぜ、無理強いするのか。子どもは、体を動かして、自然の事物など内側から出てくる興味を大切にしたいカリキュラムとすべきである。
- 4) カリキュラムは、現在の社会の反映ではなく、将来子どもが生きる社会のために、未来志向で社会的公正を目指す社会改革を目標に編成されなくてはならない。

その意味は、言い換えると次のように理解できる。

1. 「誰もが、高等数学、語学、古典、歴史など教養を高めるべきである」は、一部のエリートだけではなく、国民の誰もが学ぶべき国民的教養主義を意味している。
2. 現実生活において使いもしない、高等数学、古典、暗記の歴史知識などやめて、会計簿の付け方とか、柱の立て方とか、料理のレシピとか、パソコンの使い方とか、もっと生活に役立つ勉強にせよ、は、実用主義的なカリキュラム論を意味する。

3. 「現実の社会生活の中で、子どもの興味にしたがって問題解決になるような勉強をもっとやるべきだ」は、子どもの発達と体験を重視する総合学習、経験主義カリキュラム、児童中心主義を意味する。

4. 「格差社会の中で、貧しいがゆえに学習の機会を奪われている人たちにも教育機会を平等に」は、ゆとり教育は学力低下をまねき、格差を広げるという意味になる。このような話は、カリキュラムについて、多くの日本人が抱いているイメージではないだろうか。

以上のような分類は、学習の中身はどうあるべきかという議論を避けて、「勉強せよ」というだけの内容不問の世間的議論で終わりがちな日本の大衆教育論とは違い、世間の教育議論に載せるべき重要なバナーとなっている。

2. エドワード L. ソーンダイクの活躍

1) の議論は、ハーバード大学総長のエリオットが唱えた論である。当時、増えつつあったハイスクール卒業者に求める一般教養の内容のあり方を代弁するものであった。したがって、当時のハイスクールの入学者のうち卒業者の割合は、6人の内1人と言われている。このような議論が錯綜する中で、国民的教養としての形式陶冶とは何か、その理論的根拠となっている、「訓練の転移」という仮説は本当なのかと実証的研究に乗り出したのが、エドワード・ソーンダイクである。

実用的でない科目が、なぜ、必修中心の科目なのか。

その答えの根拠となっているのが、「形式陶冶 (formal discipline)」論である。これらの科目は、実質的に生活に関わることはない。しかし、これらを勉強することによって、頭脳が良くなって、予期しない新たな問題に遭遇しても解決出来るだけの「一般的能力」に「転移」するというものであった。これを「訓練の転移 (transfer of training)」仮説と呼ぶ。訓練の転移とは、古典や三角関数、外国語などのふだんの生活の中で使うことのない勉強の内容が、それを勉強することによって「頭が良くなる」=「一般知能」がよくなる（一般知能に転移する）という意味である。しかし、これまで誰も三角関数や代数や古典の勉強が一般知能に転移するかなどと実証した者はいなかった。そこで、当時のカリキュラムの議論の中から、この仮説の信憑性を検証しようという者が現れた。まず、小児科医の J.M. ライスである。彼は、学校での教科毎の学習時間と学力との相関を測った。それには相関がないことを明らかにした。

心理学者の E.L. ソーンダイクは、ハイスクールの教科毎に費やした時間と IQ の相関を測ったりして、具体的にカリキュラム内容について提案をした。

まず、「一般的能力」は、どのようにして測ることができるのか。19世紀後半、セントルイスの教育長 W.T. ハリスは、脳はそれらの能力地図が決まっている、その能力が満たされるようになっているなどと、独特の能力論を唱えていた。しかし、その後の心理学者は、その一般的能力は、「知能指数 (IQ intelligent quotient)」によって測ることができるとして、実際に測ってみようということで、ソーンダイクが「訓練の転移」はどの程度あるのか測ってみた。

ハイスクールでの勉強、選択科目としての三角関数や代数、古典、外国語などを半年、1年などの期間勉強した組とそうでない組との IQ の変化がどのようになったのかその相関の率を比べたものを一覧にした、表を1923年の *Journal Educational Psychology* に発表している。数年にわたり、同じ雑誌にこの相関図をいろいろな組み合わせを変え、発表している。この一覧表は、それらを総合し、IQ と各科目の関係を総合したものである。³⁷⁾

この関係表は画期的ではあるが、表に関するソーン

ダイクの説明は不親切であり、誤解を招きやすい。まず、この表を見て、注目するのは何が一番 IQ の成長に役立つのかである。1 番がフランス語、2 番が化学、3 番が三角関数である。料理、裁縫は一番役に立たないからやめるべきだと言っているようである。しかし、その両群の差異は5ポイント程度である。この5ポイント違いを大きいと見るか、小さいと見るか、ソーンダイクはほとんど説明していない。代わりに若干の細かな差異については、説明を入れている。

この表は、ソーンダイクが、1922年から1923年のハイスクールの1年間の勉強によって8564人の生徒の IQ がどれだけ改善 (gain) したのかを測定した結果の数値の表である。

この表の数値によりソーンダイクが言いたかったことは、何か。次のうち正しい選択肢は何かと問われたなら、戸惑うのではないだろうか。

ア この表は、ソーンダイクの予想通り、家庭科、料理や裁縫は、頭 (IQ) が良くなることはなく、そのような無駄な勉強はやめて、フランス語、化学、三

表1 ハイスクール各教科の勉強と知能指数発達の相関表

TABLE XII.—THE RELATION OF STUDIES TO GAINS MEASURED BY THE RELATIVE FREQUENCY OF THE STUDY IN GROUPS MAKING VARIOUS AMOUNTS OF GAIN

N being large	Equivalent superiority or inferiority in gain in score points	N being small	Equivalent in score points	N being too small to permit any estimate	
French + $0.48x + K$	2.5	Military training + $0.39x + K$	+2.0	Agriculture German Greek Penmanship Radio Spelling	
Chemistry + $0.46x + K$	2.4				
Trigonometry + $0.44x + K$	2.3				
Physics + $0.39x + K$	2.0½				
General science + $0.37x + K$	1.9½				
Latin + $0.32x + K$	1.7				
Bookkeeping $0.25x + K$	1.3				
Physical training + $0.21x + K$	1.1				
Arithmetic + $0.13x + K$	0.7				
Geometry + $0.13x + K$	0.7				
Algebra + $0.12x + K$	0.6½				
History + $0.07x + K$	0.4				
Music + $0.04x + K$	0.2				
Shop + $0.03x + K$	0.1½				
Spanish + $0.00x + K$	0.0	Journalism - $0.02x + K$	-0.1	Sociology - $0.13x + K$ Teacher training - $0.21x + K$ Psychology - $0.34x + K$ Manual training - $0.58x + K$ Physiography - $0.58x + K$	
English - $0.00x + K$	0.0				
Drawing - $0.01x + K$	-0.0½				
Business - $0.07x + K$	-0.4				
Civics + $0.24x + K$	-1.2½	Sociology - $0.13x + K$	-0.7		
Biology - $0.27x + K$	-1.4				
Dramatic art - $0.39x + K$	-2.0½	Teacher training - $0.21x + K$	-1.1		
Stenography - $0.41x + K$	-2.1½				
Economics - $0.50x + K$	-2.6+	Psychology - $0.34x + K$	-1.8		
Cooking - $0.55x + K$	-2.9				
Sewing - $0.66x + K$	-3.5	Manual training - $0.58x + K$	-3.0½		
Cooking and sewing - $1.23x + K$	-6.5				
		Physiography - $0.58x + K$	-3.0½		

角関数、物理などの勉強に力を入れるべきだということを意味している。

イ この表は、IQ の改善に一番良かったフランス語 (2, 5) と悪かった料理 (-2, 9) 裁縫 (-3, 5) との間の差の大きさは、見逃せない、ということを示している。したがって、家庭科とか、簿記のような実用科目の勉強時間は、減らすべきであるということを示している。

ウ この表は、IQ の改善に関して各教科の勉強の寄与率に差はあるもののその差は、大きなものではない。ソーンダイクの主張は、各教科の勉強は、IQ の改善率に差はあるものの、その差は大きなものではない。したがって、どの教科を重視するかは、IQ ではなく、違った「重み付け」原理によるべきである、ということを示している。

エ この表は、形式陶冶論の背後にある「訓練の転移」仮説を支持するものとなった。ラテン語などの古典の勉強は、現実生活には役には立たないが、IQ の改善には貢献している。数学や科学、文学や古典などの一般教養はもっと増やすべきだとの重要な証拠となっている。

この表の結論は、実は論文の最後の文章に隠されている。

When the good thinkers studied Greek and Latin, these studies seemed to make good thinking. Now that the good thinkers study Physics and Trigonometry, these seem to make good thinkers. If the abler pupils should all study Physical Education and Dramatic Art these subjects would seem to make good thinkers. These were, indeed a large fraction off the program of studies for the best thinkers the world has produced, the Athenian Greeks. After a positive correlation of gain with initial ability is allowed for, the balance in favor of any study is certainly not large. Disciplinary values may be real and deserve weight in the curriculum, but the weights should be reasonable.¹⁾

「ギリシャ・ラテン語も物理も三角関数もこれらを勉強すること頭が良くなっているように見える。できる生徒であれば、体育も演劇もすべて勉強し頭が良くなっているだろう。これらの勉強は、(ハイスクールの) かなりの部分である。アテネのギリシャ人が世界の頭脳であったから (古典を勉強するのだ) というだろう。元々持っていた能力が優れていたためそうだと仮定したとしても、どんな勉強が良いかいうとそれほど大きな相関はない (not large)。」

そして、次の文章は非常に重要である。

「各教科の勉強の価値は、本当かもしれない。カリキュラム上、それなりの重み付けをされるべきである。しかしその重み付けは、それなり (reasonable) であるべきである」

この“reasonable”という英語は、最近日本語化している。

そうすると、過大評価されてきた勉強・教科は見直すべきだということになる。以後、アメリカの大学の入学要件からは、ラテン・ギリシャ語が外されることが多くなったという。ただし、ソーンダイクのインパクトは、正確にどれほどであるかは、確定できない。でも、多くの教科の内容が、見直されるようになったことは、確実であった。⁵⁾

3. ラルフ W・タイラーの登場

しかし、「量として」測れない能力をどうやって測れるようにするのか。タイラーの有名な「行動の形で (behavioral terms)」という公式は、こうやって生まれたのである。⁶⁾

この公式は、現在、日本の大学の授業のシラバス作りにも学習指導要領にも強大な影響力を与えている。ただ、皆、元々の起源と意味に気がつかずに、使っているだけである。この授業のシラバスも「到達目標」を書くように強制されている。日本で普及したのは、「行動の形」でとは表現されていないが、強ちに「到達目標」という言い方で、大学の授業のシラバスを書くように指示されている。それは、元々、タイラーが「行動目標」で言い換えれば「観察可能」(測定可能) になると言ったことに端を発している。

なぜ、これほどまでに影響力をもつようになったのであろうか。それは、単なる「事實的知識」を超える「思考力」のような、より重要な「教育目標」を「観察可能なもの」として測ることができるとして、新しく、「評価 (evaluation)」という概念を広めたことにある。それまでの「テスト」や「測定 (measurement)」は、「個人差」を見て、一人一人の差異を見ること目的があり、「個人差心理学」とも呼ばれていた。

それに対して、「評価」は、システムの働きを点検する「ためのもの」であり、個人差を測るものではないとされたのである。この言葉は、私たちがふだん使っている日本語のイメージとは、大分違う。しかし、日本の学習指導要領には、このような評価概念がしっかり入っている。

さて、タイラーの考えた、行動目標とは、どのようなものなのか。

この表 (表2) では、縦軸にいわゆる国語教科書の単元がならんでいる。これは、「内容目標」と言う。そ

細目表 (幼~小6)

[illegible]

イ 縦軸の「1.0言語（本質・語彙・方言）」「2.0言語技能（読み・書き・話す）」「3.0文学（詩・散文）」は、教科書にあるようなジャンルを示したものである。言語教科の各単元の横軸の「知識」「理解」「分析」「応用」「評価」「態度」「受容」「参加」のような活動領域は、「行動」としては単元の内容とは次元の異なる

表3 中学校数学の単元目標（縦）と行動目標（横）のクロス表

表 8—1 中学校数学に関する細目表

内 容	認 知 的																情 意 的									
	A.0 計 算		B.0 理 解				C.0 応 用				D.0 分 析				E.0 興 味 と 態 度				F.0 評 定							
	特定事実の知識	用語の知識	アルゴリズムを実行する能力	概念の知識	原理・法則・一般化の知識	数学的構造の知識	あるやり方から他のやり方に問題の要素を变形する能力	推論の筋をおいかけける能力	問題を読み解く能力	きまりきった問題を解く能力	比較をする能力	資料を分析する能力	型、同型、対象を見分ける能力	きまりきつていない問題を解く能力	関係を発見する能力	証明をする能力	証明を批判する能力	一般化を形成し確実にする能力	興 味	態 度	動機づけ	不 安	自己概念	外面的評定	内面的評定	操作的評定
	A.1	A.2	A.3	B.1	B.2	B.3	B.4	B.5	B.6	C.1	C.2	C.3	C.4	D.1	D.2	D.3	D.4	D.5	E.1	E.2	E.3	E.4	E.5	F.1	F.2	F.3
1.0 数の体系																										
1.1 自 然 数																										
1.2 整 数																										
1.3 有 理 数																										
1.4 実 数																										
1.5 複 素 数																										
1.6 有 限 数 系																										
1.7 行列と行列式																										
1.8 確 率																										
1.9 記 数 法																										
2.0 代 数																										
2.1 代 数 的 表 現																										
2.2 代 数 式 と 解 法																										
2.3 関 係 と 関 数																										
3.0 幾 何																										
3.1 測 度																										
3.2 幾 何 的 現 象																										
3.3 形 式 的 推 理																										
3.4 座 標 軸 と グ ラ フ																										

るアクティブ・ラーニングの「アクト」に相当する。

教育の目標は、「知識・技能（計算も含む）」ばかりではない。現行指導要領では、「思考力・判断力・表現力」も大きな目標となっている。

次に、中学校数学の「行動目標」の一覧表（表3）を見てみよう。「計算、理解、応用、分析、興味、評定」と用語に違いがあるが、基本的な構造に大きな違いはない。要するに、育てようとする「行動目標」には、共通するものがあり、詳細な知識項目（縦軸：内容目標）ばかりを並べて「覚える」だけの無駄な勉強はやめよう、もっと伸ばすべき能力（行動目標）があるというメッセージなのである。

3.1 「知識」を超える行動目標

では、タイラーとその一番弟子ベンジャミン・ブルームらが考える行動の目標として描かれていた行動目標とは、一体何であったのだろうか。

ブルームらが後に構築した「教育目標の分類学（taxonomy）」は、この暗記の知識を超える行動目標を認知領域の主目標として、次の5つの目標を掲げている。

1 知識 2 理解 3 応用 4 分析 5 総合 6 評価
「知識」を超える「理解」とは、何であろうか。

ブルームらのタキソノミーにおいては、「応用」は、違う形で述べられている。「特定の具体的場面の抽象化。抽象化は、一般的観念、手続きの規則、一般化された方法の形でなされる。抽象化は、記憶され、応用される原理、観念、理論の形である。応用は、科学的概念や観念の他の現象に使われる。」

ソーンダイクが、「一般化」と呼ぶところの原理は、新たな問題場面に遭遇した時に一般化された原理を応用し、問題の解決を図ることができるためにある。それは、問題をより一般化した形で見ることが可能にす

る。

続く「分析」とは、なんであろうか。「抽象化した構成要素を分解したり、構成要素の関係性を考えたり、その関係性を相手にわかるように表現できる。このような分析は、コミュニケーションをより明確にし、コミュニケーションを組織化し、結果を有効にし、要素間の関係性をより有効なものとする。」

次は、「教育目標のタキソノミー (taxonomy, 分類学) (B.S. ブルーム) といわれるものの目次の一部分である。行動目標を単なる「分類」から「分類学」にまで、高めた目標の学問的体系といわれる。単なる「分類」は、重なりがあったり、境界線がはっきりしない。他方「分類学」は、生物学における動植物の系統樹のように体系化をしたものと言われる。

次に、より高次の行動目標と考えられている、「応用」と「分析」には、どのような問題があるのかを考える。英語では、やや細かい定義となっている。以下意識してみよう。

3.00 応用

特定のそして具体的場面での抽象化。抽象化は一般の観念、手続きの規則、一般的方法の形でなされうる。抽象化は、記憶され、応用されるべき技術的な原理、観念、理論である。

現象への応用は、科学的な言葉であるいは概念で論じられるものである。

生物学的な場面で相似するある要因の変化の考えられうる効果を予測する能力である。

4.00 分析

観念の間の相対的な階層化が明確になされたり、観念間の関係が明確になるようにコミュニケーションを構成要素と部分に細分化すること。そのような分析は、コミュニケーションを明確にしたり、コミュニケーションを組織する方法を示したり、効果的で、整理ができるようにコミュニケーションを組織化するためになされる。

4.10 諸要素の分析

コミュニケーションに含まれる諸要素の確認。

隠されている仮説を認識する能力。

事実と仮説を区別する力

「知識」を超える「応用」と「分析」とは、どのようなことなのだろうか。それは、暗記した知識の再生ではなく、新たな問題場面に遭遇して、それまで持っている知識を応用し、分析し、構成要素を細分化し、相互の関係性を整理するという判断力を意味する。この

ような行動目標の具体例は、有名校の入試問題例を紹介することによって明確になる。⁹⁾

例えば、スポーツにおいて時間を区切ることの問題
サッカーのペナルティキック戦と柔道のポイント制のルールを説明した表がある。このような制度は、テレビやラジオで中継する上でどのような利点があるか、表を参考にして答えなさい。

サッカーのペナルティキック戦

同点のまま試合時間が終わった場合、両チームそれぞれ5人の選手が交互にペナルティキックを蹴り、得点の多い方を勝者とする方式。

柔道のポイント制

試合時間4分のなかで、技を決める「一本」勝ちがでない場合「1本」に近い有効な技に与えられる、「技あり」の判定を多くとった方を優勢勝ちとする方式。
解答

ア 利点はなにもない。

イ 野球は、放送延長のサービスがあるのに、なぜ、時間を区切るのか。

ウ 試合は最後まで見たい。

エ 放送時間内に試合の決着を放送できる。

この問題は、知識の問題ではなく、スポーツのゲームにおける時間制限を設けることと、その社会的影響という関係性について判断を問われている。それは、具体的場面を抽象化し、観念として言い換えるということの頭の中でやらなければならない。そして、時間制限の観念と社会的影響という観念の関係性について、自分の頭の中で関係性を判断しなければならない。行動目標における「応用」と「分析」という2つの目標が達成されなければならない。

では、「評価」までの行動目標は、具体的に何を意味しているのか。そのテスト問題を考えてみよう。

行動目標の分類学 (taxonomy) は、次のように説明している。

5.00 総合：あまり明確ではなかった部分、要素のつながりを関係づけ、まとまりのある構造化を図る。観念や感情や経験を自分なりのやり方でまとめ、伝える。個人的経験を伝える。

5.1 課題と計画案の作成

5.30 特定のデータや現象を説明する抽象的な関係性や命題を演繹的に引き出す。仮説構成能力

6.00 評価：素材と方法の価値についての判断。生徒に応じて、ある程度の規準を満たす素材と方法に

についての量的質的判断。

6.10 内的な証拠（正確さ、一貫性）などの内的
規準からの表現の正確さの判断。

6.20 外的規準による判断。素材について、他と
の比較や規準によって判断すること。

日本語では、「論理的思考力」とか「思考力」とか言われているものを英語で表現すると途端に複雑で難解なものになる。知識を超える高次の思考能力とは、何か、を示したものが、2～6の行動目標である。さらに、日本の中学入試の問題例をあげてみよう。

秩父では1884（明治17）年に大きな事件が起っています。銃などで武装した数万人の農民たちが政府の軍隊と衝突する事態にまでになって、自由民権運動の中でも最大の事件として記憶されています。明治政府はこの事件を少数のならず者やばくち打ち、脱獄者が農民たちをそそのかして起こした事件であると発表しました。そして当時の報道機関政府の発表に従って報道しました。しかし、事件の背景には、フランスのリヨン市などで生糸価格が暴落し、その影響で農民たちの生活がひどくおびやかされたことがありました。政府は農民たちを救おうとしませんでした。農民たちには切実な要求があったのです。傍線部について、政府はどのような考えでこのような発表をしたのですか、説明しなさい。

上の文は、秩父で起きた事件についての説明と問題文である。ここでは、以下の4択から正解をひとつ選ぶ。

- ア 実際、犯罪者集団の起こした事件であるから。
- イ 秩父は、当時の過激派集団の集まりであるアナークストやプロレタリア運動集団の拠点であったから。
- ウ 農民たちが同情されるような情報が流れ、政府への不満が広がったり、似たような事件が起ることを防いだりするた
- エ 西洋列強の主軸の一つ、フランス政府への遠慮があり、民衆蜂起などとは、言えなかったから

- ア イとウ
- イ アとウ
- ウ ウとエ
- エ イとオ

この問題で、あまり明確でなかった部分や要素としては、秩父の困民党、武装した数万の農民、自由民権、フランスのリヨンの生糸価格の暴落、という要素があ

る。「仮説構成能力」とは、これらのばらばらの要素を「説明する抽象的な関係性や命題を演繹的に引き出す」力である。それが答えの選択肢になっている。それらは、「素材と方法の価値についての判断。生徒に応じて、ある程度の規準を満たす素材と方法についての量的質的判断」という「評価」目標となっている。

3.2 行動目標派の「思考力」概念の限界

このような行動目標派の「思考力」概念は、思考力という一般的概念として十分であろうか。再度、思考力というものを問い直してみよう。思考が生起するには、まず、仮説を構成し、予想を立て、実際に実験や歴史的事象によって検証するというプロセスが必要ではないだろうか。その手法は、自分の思考内容を絶対視せず、異なる立場の意見を尊重し、お互いの仮説の妥当性を事実によって検証するプロセスが入る。思考には、このように仮説の構成と「検証」というプロセスが入る。

思考には、このように仮説の構成と「検証」というプロセスが入る。このようなプロセスは、科学哲学者によって、定式化されてきたものである。しかし、行動目標派においては、暗記的知識を超える構成要素の関係性を考えるという言い方にとどまっている。従って、行動目標派における「思考力」概念は、不十分のまま、そのシステムの構築が進められ、肝心の能力概念の内容自体が不明のまま進められてきたと言える。

そのシステムは、ブルームらのタキソノミーではなく、リー・クロンバックの“Course Improvement through Evaluation”という「フィードバック評価」論によって進められてきた。残念ながら日本での翻訳は、“course”は、「授業」という訳になっており、クロンバックの意図した評価しながら「教科書」ないし「カリキュラム」作りをするという意図は、伝わらなかった。それは、当時のソ連との冷戦体制の中で、後れをとっていたアメリカの理科系の教材が追いつき追い越せという政治的な使命を与えられての開発であった。¹⁰⁾

1960年代に発表されたこの論文は、その後いろいろな本において再録され、「評価」とは、システムの働きをチェックし、カリキュラムを作るために評価はされねばならないものと考えられるようになった。この評価のフィードバック機能は1930年に始まり、1942年まで続く八年研究という進歩主義教育と伝統的なカリキュラムのハイスクールの実験的な比較評価研究において明らかにされたものであった。このクロンバックの論文が明らかになって以降、ブルームらが授業の方法を細分化した目標の到達度を管理し、授業のステップをモニターして授業の内容を随時改変していくという、

考え方へと変容していった。後に、このスモールステップで到達目標の達成度を測り、目標と授業の方法を随時か変更し、ゴールに近づけるという授業内評価法は、「形成的評価」(formative evaluation)と呼ばれるようになった。このフォーマティブの命名者のマイケル・スクリブンは、クロンバック流の「カリキュラムを作る」という意味でこの言葉を使ったのである¹¹⁾。

しかし、ブルームは、それを授業の管理の意味で使い、普及させた。日本では、この授業の経営システムという意味での「形成的評価」が主流であり、それが、現在の学習指導要領においても色濃く影響を与えている。

現在の「カリキュラム・マネジメント」とは、到達目標をまずシラバスに書き、それを達成するための授業の活動内容を書き、それを授業途中で評価し、次のステップにつなげるというPDCAサイクルと基本的に同じ考え方である。

現行学習指導要領では、PDCAのサイクルで、カリキュラム・マネジメントを進めるように、勧められている¹²⁾。

カリキュラム・マネジメントの3つの側面 学校教育の効果を常に検証して改善する 自分の思いを自信をもって伝え合える子供を育てよう。PDCA

1. PLAN 教育課程の作成
2. DO 授業を実施
3. CHECK 学習状況を評価
4. ACTION 改善につなげる

学習指導要領は、例示として地域のお祭りをあげ、その評価例をホームページに載せている。

学校教育目標の達成につながるかどうか、常に確かめながら教育活動を行う地域の方の話を真剣に耳を傾けていた姿も印象的です。

自信をもって話が出来た子供が増えてきましたね。

来年度は、自分の思いを伝えるだけでなく、相手の思いをしっかりと受け止めることが出来る子供を育てましょう。

地域の伝統や文化について調べたことを、英語で生き生きとALTに伝えていました。

地域の方の話を真剣に耳を傾けていた姿も印象的です。

このカリマネの考え方は、大学の授業を定式化するというほどにまで影響力を発揮し、多くの大学人にまで到達目標を記入したシラバス作りに奔走させるまでになっている。フィードバック評価を組み入れる循環システムとして授業を目的合理的に管理運営することに理想的な授業管理システムのように見える。しかし、この管理システムは、その結果を目的合理的に管理す

ることを可能にしたかのように見える。しかし、教育の現場は、このシステムの「随伴結果」に音を上げている。

このカリキュラム・マネジメントの物語は、実際に全国一律に行っている、到達目標、活動内容、ポートファリオ、履修カルテの実態とは、全く異なっている。実際のカリマネの内容は、全国一律に決められた目標を書き、その目標から逸脱するのを許さないような一覧表を書くようになっている。タイラーらが本来目指していたような教育者が主体的に創造するような教育目標や活動内容とは異なり、管理文書として整っているだけの公式文書作りとなっている¹³⁾。

どんなに目的合理的に見えても、人間を相手に営為しなければならない教育の現場は、全く異なる文脈で動いている。現場の教師は、生身の生徒を見るよりも行動目標を中心に文書を作ることに多くの時間をとられ、教職をブラック化するという随伴結果をもたらした。

このカリマネの現実とは、1970年代に論争となっていた2つの対立するパラダイム「工学的接近」と「羅生門的接近」において、羅生門的接近が主流とならなかったという歴史を思い起こさせることとなっている。羅生門的接近は、同じ事実についても見る主体の目、立場によって違った価値判断、多様性があるという立場である。同じ事実とは、この多様性の中で各主体が先入観を一旦捨て、事実そのものを「曇りなき眼」で見直すことを求めている。曇りなき眼とは、マイケル・スクリブンが表したような「ゴール・フリー・エバリュエーション」である¹⁴⁾。

このような中で、吉田章宏は教授学習過程における評価の「方法論」を「工学的接近」と「羅生門的接近」という図式に集約し、両者の対立点を明確に浮かび上がらせていた。しかし、「羅生門的接近」は、現象学の言葉の難解さ、また、象牙の塔にこもっている学者書士の孤高さゆえに、大衆化することなく現代にいたっている¹⁵⁾。

本論文は令和3年度立正大学心理学研究所の研究助成金による研究成果である。

注

- 1) Dian Ravich. *The Death and Life of the Great American School*. 2010 p.76
- 2) Herbert Kliebard. *The Struggle for the American Curriculum: 1893-1958*, First 1986 and Second 1995.
- 3) Edward L. Thorndike. "Mental discipline in high school studies." *The Journal of Educational*

- Psychology*, 15(2), 1924, pp.1-22:83-98
- 4) Ibid., p.98
 - 5) Harold Rugg. "Three decades of mental discipline: Curriculum-Making via National Committees," in Rugg, *et al.*, *Curriculum-Making: Past and Present*. NSSE (National Society for the Study of Education) Yearbook, Vol. 26-1, 1927, pp.33-65
 - 6) Ralph W. Tyler. *Basic Principles of Curriculum and Instruction*. The University of Chicago, 1949. この書は、1969年の時点で49版を超える、アメリカの教育界の驚異のベストセラーとなっている。
 - 7) ブルームらの文献, B.S. ブルーム, J.T. ヘイスティングス, G.F. マドゥス『教青評価法ハンドブック』, 梶田穀一他訳, 第一法規. 1973年, その他を中心に紹介されている「形成的評価」表である。
 - 8) ブルーム (B. S. Bloom) らによる『教育目標の分類学』Bloom, *et al.* *Taxonomy of Educational Objectives*, David McKay, 1956
 - 9) 松本百正『超難関中学のおもしろすぎる入試問題』平凡社, 2020年
 - 10) Lee J. Cronbach "Course Improvement Through Evaluation," *Teachers College Record*, vol. 64, no. 8, 1963 (R.W. Heath. ヒース編, 東洋他訳『新カリキュラム』, 国土社. 1965年. 所収), p.675
 - 11) Michael Scriven. "The methodology of Evaluation," in AERA Monograph-1, *Perspectives of Curriculum Evaluation*. Rand McNally, 1967.
 - 12) 文部科学省のホームページ https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/_icsFiles/afeldfile/2014/12/04/1353826_2.pdf
 - 13) 浅沼茂「履修カルテ」「自己評価票」「ポートフォリオ」の諸問題」立正大学教職教育センター年報1. 2019年 pp.1-12
 - 14) Scriven. Op cit., p.54
 - 15) OECD の国際セミナーの教育報告書『カリキュラム開発の課題』文部省大臣官房調査統計課, 1975年12月, pp.47-57

要 約

本稿は、教育心理学の歴史的人物であるエドワード・L. ソーンダイクがなした業績がその後の日本のカリキュラム作りにどう関わり、その後の歴史がそれによってどう変わってきたのかを明らかにすることにある。ソーンダイクの発見は、伝統的なカリキュラム観である形式陶冶論にかなりのダメージを与えた。古典を軽視し、「ショッピングモール・ハイスクール」とまで言われるようなアメリカのハイスクールの歴史的展開に影響を与えたとも言われている。しかしながら、ラルフ・W・タイラーは、ソーンダイクのS-R心理学の限界に対して異を唱え、「補足しがたい (intangible)」とされる暗記的知識を超える教育目標を「観察可能な (observable)」形へを変換するため「行動目標 (Behavioral objectives)」の形 (terms) によって目標を分類し直すことを唱えた。それによって、勉強の目標を暗記的な知識だけでなく、より高次の「思考力」目標に力を傾注することを可能にするものと考えられた。日本においてこの行動目標派が、カリキュラム開発の中心的アプローチのヘゲモニーを握り、カリキュラム・マネジメントという言葉で学習指導要領などの官僚的な管理主義的な文書作りの中心的パラダイムとなった。教職のブラック化には、このような歴史的背景があるということを忘れてはいけない。

キーワード：エドワード・ソーンダイク、ラルフ・タイラー、カリキュラム・マネジメント